

岩崎秀雄『流動的多様体 polymorphorest』(2007)
(黒模造紙)

幼少期から切り絵を作ってきた。切り絵はシンプルな技法だ。紙と刃物があれば誰にでもできる。その切り絵の王道・本質とは何か。切り絵でなくては出来ぬこととは何か。それを通して何か一般的な表現行為たるには何が必要なのか。たとえば、そのシンプルさを研ぎ澄ましていくこと。

切り絵は二次元ではなく、三次元性をもったメディアだ。台紙への貼り付けや平面としての提示はその側面を殺す。表紙では「二次元画像」として提示しているが、実際の展示では天井から吊ったり、光を透過させて影を含めて提示することが多い。また、裏から見ても鏡像反転画像が見えるし、紙は縦横にたわむ。だから、向きや裏表を固定することも可能性を狭めてしまう。そのことを自覚した1990年前後から、当時ほとんど例のなかった切り絵の抽象表現の可能性を模索することになっていく。その中で、細部を見ても全体を見てもザワザワと息づいているような構成を目指した。その意味は、当時はよく分からなかったが、のちに生命と芸術の関係性について体系的かつ体験的に探究するベースとなった。



刃物以外の描画ツールの影響を避けるために、下書きはしない。ペンで下書きしたものは、やはりペン画の延長線に留まってしまうから。そうではなく、刃物で即興的にオエカキをする。子供のオエカキと大差ない。ただ、大きく違うのは「時間」だ。やたらに時間を喰う即興である。決して瞬発的でない（将棋の長考に近いかもしれない）。一度始めると、終わりが見えない茫漠とした不安と恐怖の数か月がかならずやってくる。減法不自由な技法でもある。何しろ簡単にちぎれる。一度切ったものを繋ぎ直すのは、自分的にはご法度だ。でもその不自由さは別の可能性を与えてくれる。常に紙に指先が触れているため、触覚を頼りに切っていくことになる。切り絵は、少なくとも作家にとって視覚芸術である以前に触覚芸術なのだ。すると、「このように見える画像を切る」のではなく「このように感じられる触り心地をつくる」ことを優先する場合がある。この意味でも、下書きからの解放は重要なのだ。肉体は常に緊張を迫られるが、それと引き換えの圧倒的な自由が支配する。それは舞踏などの身体技法に通ずる感覚に違いない。